

はじめに

鎌倉後期に起こった蒙古襲来（モンゴル戦争）に関する史料の蒐集は古くから進められてきた。なかでも、この戦争に参加した、肥後国（現・熊本県）御家人の竹崎季長が描かせたという、通称「蒙古襲来絵詞」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）は、両度の戦争を活写した希有な歴史資料・絵画史料として著名である。モンゴル戦争の基本史料の一つとして、本絵巻がもっている意義は極めて大きなものがある。これはもはや斯界の共通認識と言ってよい。ただし、絵画作品の常として、迫力ある本絵巻といえども、もとより実景を描写したものではない（粉本・型紙の利用は日常茶飯事である）。この点を弁え、構築主義的に本絵巻を読み解いていく必要がある。

ところで、この絵巻が現在の状態（現状）になったのは、江戸時代の寛政年間（19世紀初頭）の修理・成巻による。また、この絵巻には錯簡や改変が多く、寛政の修理までの間に、少なからぬ補筆や改作が施されたことも確実である。そのもっとも典型的な具体例が、著名な下記場面であろう。3人の蒙古兵に立ち向かう、流血の馬上の竹崎季長。彼の頭上付近には「てつほう」（鉄砲；『金史』に見える「震天雷」カ）が爆裂している。そして図の左方には、日本兵の矢から逃げ惑う蒙古兵の姿が窺える。ひときわ印象的なこの蒙古兵3人が、紙の継ぎ方の分析や赤外線写真により、絵巻原本作成時には存在せず、のちに加筆されたものだという事実が明らかとなった（佐藤鉄太郎氏・太田彩氏）。またしばしば注目される「てつほう」自体も、描画の時期はともかくとして、後世の書き入れであるという意見が出されている（佐藤鉄太郎氏）。「てつほう」描画の時期は措くにせよ、この場面は、別のストーリー仕立てだったものを、竹崎季長の勇猛さを印象づけるために料紙の順序を入れ替えて成ったものである。

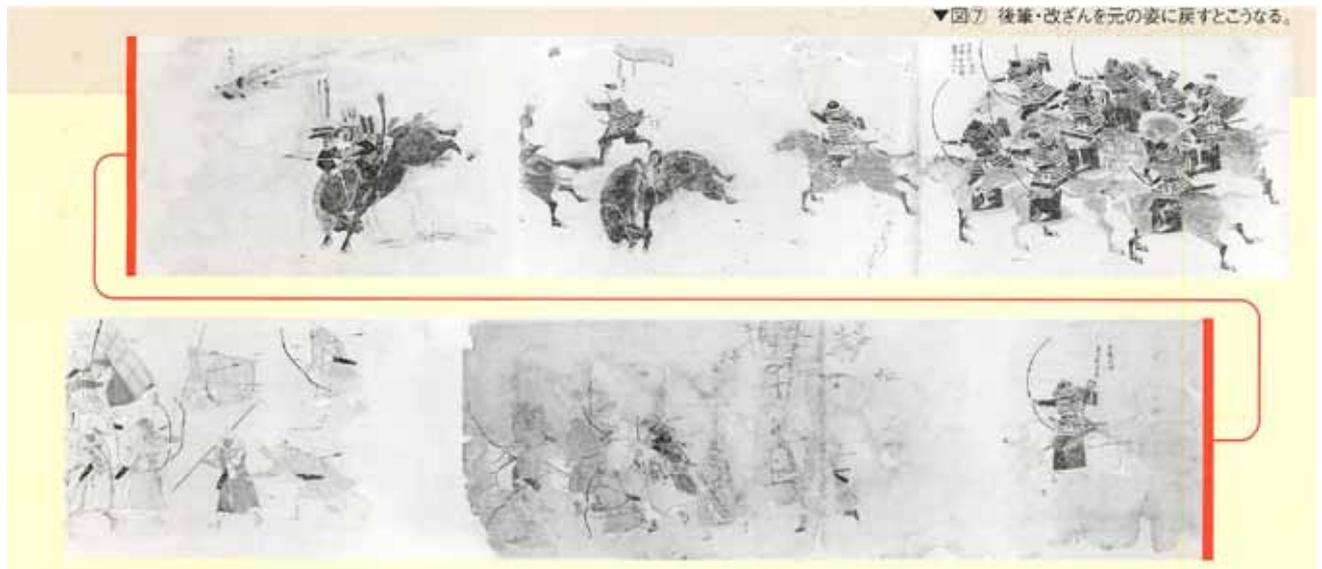


▲図5 馬を射られ、「てつほう」（鉄砲）を受けながらも蒙古兵に挑みかかる竹崎季長。ただし、有名なこの部分は加筆修正されていることが確実（左図5参照）。

◀図6 赤外線写真で見ると、蒙古兵3人が後筆されたものであることがはっきり分かる。明らかに演出を強めるための工夫だ。

*最近、服部英雄^{はっとりひでお}氏は、3人の蒙古兵が本絵巻と同時期に描かれたものであると主張した。その筆致の巧みさは、工房の主が希代の歴史事件を渾身の力で描いたためだとし、また紙継ぎ部分にわたって（多少遅れて、あるいは異筆にて）描かれたのは、通常、絵巻では紙一枚ごとに絵を描き、継いだあとに、紙をまたいで描くのが普通だからだ、とも述べている。しかし、卑見のみならず多くの論者が同じ意見だと思われるが、3人の蒙古兵の絵姿は、周囲の蒙古兵と似ても似つかぬものである。異論もあるが、同一工房で描かれた蓋然性は著しく低いと考えられる。また、絵巻は通常、ある枚数の紙を継いでから、詞書きや絵画を描くものである（これは実際に絵巻物を実見すれば分かることである——ちなみに報告者は2017年5月、サントリー美術館の『絵巻マニア列伝』展において、この点を中心に絵巻類を観覧したが、例外なく、先に紙を継いで文章や絵画を入れていることを確認した）。紙をまたぐから異筆の絵画が描かれても不自然ではないという論法は、簡単には成り立たないと考える。

上記場面を、太田彩^{むらいしやうすけ}氏や村井章介^{あねねこ}氏の見解をもとに「復元」してみると、以下のようになる（「てつはう」については仮に残したが、制作当初には描かれていなかった可能性もある）。つまり、逃げ惑う蒙古兵たちを、竹崎季長とともに従軍した姉婿の三井資長——季長はむしろ資長の事実上の配下であったか（石井進説）——を筆頭に、馬や弓矢で追い込んでいく構図が本来の姿であった可能性が高いのである。



（以上、九州国立博物館 開館記念特別出陳パンフレットより転載）

事ほどさように、本絵巻の現状から、歴史的事実を素朴に読み取することは不適切・不可能である。また、本絵巻の物理的不自然さも枚挙に暇なく、ひとつずつ潰していかなければならない。先学によれば、料紙の種類やサイジング^{にじ}（滲みどめ）の有無なども一貫していない。詞書きや絵画表現のタッチの違いなどについても、数多くの指摘がある。要するに、本絵巻は、さまざまな謎を抱えた絵画史料なのである。それゆえに、本絵巻に関する先行研究は輻輳を極めており、今後もなお、周到な史料批判を推し進めていく必要がある。それ抜きに、本絵巻を歴史資料として十全に扱うことはできないだろう。

ただし本報告では、そうした画面上の絵画・書蹟分析から敢えて一線を描き、また近年のモンゴル戦争研究の進展——とりわけモンゴル帝国史研究や鷹島^{たかしま}（長崎県松浦市）に沈んだモンゴル軍船に関する水中考古学の展開——については他の報告や論著に譲り、本絵巻が現状に至るまでの前提条件を考えてみることにしたい。具体的には、本絵巻の全体的理解の鍵となる、「奥書」に論点を絞って、その歴史的性格を見極める途を採りたいと思う。というのも、この「蒙古襲来絵詞」には、普通なら一つだけしかないはずの「奥書」（巻末の作成趣意書）が二つも存在し、それが必ずしも同一内容を語っていない、という謎

を孕んでいるからである。本報告のタイトルに比して羊頭狗肉の感は強いが、まずは奥書 A・B の分析に注力して、本報告の責めを塞ぎ、今後の研究の礎とすることを旨したい。

さて先述の通り、この絵巻を最大限活用するためには、さまざまなレベルの史料批判が欠かせない。大前提として、発注者の意図や絵師の世界観に肉薄するまで、絵巻の現状にまとりついたヴェイルを順次剥ぎ取る作業が不可欠である。しかし本報告でそのすべてを試みるのは不可能であって、上記の如く、問題設定を限定した次第である。こうした作業の先に、「蒙古襲来」(モンゴル戦争)の実像・実態を逆照射する手がかりが得られるようになるであろうし、またモンゴル戦争の表象論ともいべき、イメージの世界の汎アジア史に広がっていくとすれば、望外の幸せである。

1. 「蒙古襲来絵詞」を読み解くために

(1) 絵巻の概要説明

まず蒙古襲来絵詞について簡単に紹介しておく。本報告のタイトルには、わかりやすさも考慮して、便宜的に通称「蒙古襲来絵詞」を掲げたが、本絵巻の主人公にしてその活動を描いた、「竹崎季長の絵巻」、つまり「竹崎季長絵巻」と呼ぶべきという意見も根強く、報告者は実際には後者に近い立場である。ただし、さしあたり今は結論を留保しておきたい。

現在、宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵される原本は、現状、上下(前後)2巻で構成される。主人公にして発注主(作製依頼主)とおぼしき竹崎季長の家から流出し、いずれの段階で熊本の^{おおやのけ}大矢野家の所有に帰した。そして1825年(文政8)、熊本藩主細川家に預けられ、江戸にもたらされて多くの武家の知るところとなった(例、^{まつだいらさだのぶ}松平定信の閲覧・摸写→^{がくおう}「楽翁本」製作)。その後、近代に入り、1890年(明治23)、臨時全国宝物取調委員会の調査によって原本所有者大矢野家から本絵巻が買い上げられ、宮内庁に収められた。現在、皇室の御物と言われるが、実際には、現在は三の丸尚蔵館の所管品、という扱いである。

*なお、天草出身の大矢野家は文禄・慶長期に肥後南部の^{こにしゆきなが}小西行長の与力となり、その後、西軍の^{せきがはら}小西家が関ヶ原の戦いで滅びると、肥後一国を領することになった加藤家に所属(^{たまな しもながたむら}玉名郡下長田村に領地を安堵される)。加藤家改易後は細川家の家臣となり、玉名郡に拠点有することとなった。

絵巻の法量は、おおよそ以下のとおり。前巻(上巻)がタテ40.3cm×ヨコ2450.6cm、後巻(下巻)がタテ40.2cm×ヨコ2111.8cm。順序等にはさまざまな見解があるが、通常、現状に即して、前巻に詞一から詞九まで、絵一から絵十まで、後巻に詞十から詞十六まで、絵十一から絵二十一までが配されていると考える。実に長大な絵巻物である。ただし、過去には3巻にまとめられたこともあり、また前後入れ替えや錯簡・削除があったり、料紙の質や大きさがバラバラであったり、これは後段にて詳述するが、一部の詞書と絵とが別置されていた(大矢野家に秘匿されていた)ことがあるなど、作成時の状態を復原するのは極めて難しい。それゆえ、史料研究に関する蓄積も膨大である。たとえば、最低でも同様の絵巻が二本(正本・副本)作られたという説が唱えられており、それなりに有力と思われるが、果たして二本で済むのかどうか、三本説も唱えられており、今後も引き続き検討していかねばならない。

(2) 本絵巻研究の視角と課題

こうした絵巻物史料を理解するためには、絵(絵画部分)と詞(詞書き;文章部分)とから成る絵巻全体の細部はもちろん、通常、巻末に置かれる^{おくがき}奥書(制作趣意書)を理解することが大切である。前者は絵巻の全体を通じて、細部にこだわる視点・方法であり、後者は、絵巻の全体を対象化して位置付ける、

メタ的な視点につながる。絵巻研究は、前者と後者の緻密な検討と、両者の往復・接合とによって昇華されていくこと、贅言を要すまい。ただし、錯簡や改竄、補筆・加筆等の多い本絵巻に限って言えば、まず後者の全体的把握を優先させ、それにより、前者の細部の改変を解釈していく、という手順が重視されるべきと考える。それが、本絵巻が現状に至る過程を解明することにつながり、そのヴェイルを順次剥がしていくことで、制作当初の姿（原態）に近づいていけると判断するからである。

*とはいえ、細部の分析によって本来の絵巻の姿に近づくこと、あるいは絵巻の「実証性」を高める研究は着実に進んでおり、最近では、詞二の錯簡の分析を中心に、竹崎季長らの進軍の経路を解明した堀本一繁氏の研究などが際立っている。

さて、不思議なことに、本絵巻には奥書に当たる詞が2つ残されている（順番にA〔詞十五〕・B〔詞十六〕と便宜的に呼ぶ）。「永仁元年二月九日」（永仁元年＝1293）という同じ日付ながら、それぞれ異なる筆致で、まったく異なる趣旨の内容が記される。

簡単にいえば、Aでは「〔安達〕泰盛の事」と書き出され、泰盛から「直に御下文を給わり、御馬を給わる事、ただ季長一人ばかりなり」とあるように、御家人竹崎季長が（海東郷地頭職を拝領するにあたり）鎌倉で世話になった安達泰盛の鎮魂が謳われたと考えられている。

これに対してBでは、季長が帰依していたらしき甲佐社（大明神）に感謝し、まさに海東郷地頭職に任じたことに報謝する内容が記される。具体的には、甲佐の大明神がこの世に現われ、社壇の東の桜の枝に止った、この「東」とは関東（「くわんとう」）のことであり、将来、地頭職を獲得する海東（「かいたう」）と「同じ文字」なので——似ているすら思えないほど強引だが——、季長は関東への出訴を思いついた、そして実行に移して成功した、という筋書きである。

そしてもっとも興味深い事実は、この「永仁元年二月九日」という日付の表記は当時存在せず、正しく書くとすれば「正応六年二月九日」とすべきだったという点であろう（荻野三七彦説）。永仁への改元は正応6年8月5日のことであり、中国・朝鮮のごとき即位年（零年）の観念のなかった中世日本では、同年（1293年）の8月5日までは正応年間、それ以後は永仁元年と記するのが普通である。つまり、この「永仁元年二月九日」という書き方は、正応6年2月当時の人間には知る由もない元号表記、つまり「未来年号」なのであった。逆に言えば、この日付の記載は、永仁改元以後のものとするほかない。つまり、本絵巻そのものが、文永・弘安の戦争時（1274・81年）を少なくとも十年以上くだる時期に制作されたという事実を明示するわけである。それどころか、永仁元年をさらに降ってしまう可能性すら否定できない。本絵巻の制作意図が見通せず、多くの研究者を悩ませることとなった所以である。

*こうした絵巻物には、ふつう奥書が添えられ、年月日も記載される。もし原「蒙古襲来絵詞」が正応6年当時に作成されたならば、「正応六年二月……」と記されたであろう。当然、のちに改竄・改作を行なう人間は、この日付をなぞるのが自然と思われ、ゆえに本絵巻原本（宮内庁三の丸尚蔵館蔵本）の原態が永仁元年以降のことだと推定できるわけである。

さて、近年、奥書A・Bともに絵巻そのものから切り離して理解すべきという問題提起（宮次男説）が改めて強調された（服部英雄説）。服部氏曰く、Aについて言えば、季長はその後、安達泰盛派と縁を切っていたと考えられ、だから岩門合戦に参加しなかった、と説く。またBでは、絵巻そのものに熊野先達（熊野神社系修験者・山伏）が登場するのに、阿蘇神社系の甲佐社（大明神）が出てくるのは如何にも後付けに過ぎないだろう（なお服部説に拠れば、肥後の熊野信仰の拠点は玉名にあり、玉名周辺に位置する竹崎こそが季長の名字の地だという）、そもそも海東郷の地頭職を季長が得たということは絵巻の本体

には一度も出てこない、つまり絵巻と奥書 B とは対応しないのではないか、という問題提起である。

ただし、A の筆跡は、漢字にルビが振られるなどの特徴を持ち、書体・字姿を見ても、のちに問題とする詞九——内容は詞二や詞七と大きく重なる——と同じ手（筆跡）と見てほぼ間違いない（宮次男氏・小松茂美氏・太田彩氏ら）。もちろんそこには季長が安達泰盛に訴え出る場面が記され、その恩顧が強調される論理展開である（ただし詞七と詞九との筆跡も異なる）。そうだとすれば、奥書 A を根拠に季長が反泰盛派の立場を取っていたという服部説は、現在の絵巻の全体構成から見れば首尾一貫していない、と言わざるを得ない。

*ちなみに、石井進氏は誤写混入と考えてか（小松茂美氏も別本からの混入に過ぎぬと見なす）、この詞九を『中世政治社会思想』（上巻）に収載しなかった。そのため、石井説では、詞十が「九」と番号付けされ、宮内庁本に依拠する詞書きの番号（通例・通説）と一つずつずれることとなった。つまり、奥書 A（宮内庁本の詞十五）は石井翻刻では「一四」となり、奥書 B（宮内庁本の詞十六）は石井説では「一五」と番付けされることとなった。この点、注意が必要である。

周知の通り、竹崎季長が恩顧に感じたであろう 3 名——安達泰盛・安達盛宗・小式（武藤）景資——は、8 代執権北条時宗・9 代執権貞時の御内人筆頭の平頼綱の謀略により滅ぼされた（1285 年（弘安 8）、霜月騒動）。とくに泰盛派の小式景資は、福岡県での岩門合戦（1284 年（弘安 7））において、当時家督を争っていた兄の小式経資に滅ぼされてしまう（経資は必然的に反泰盛派の平禅門側につく）。この岩門合戦に際して、竹崎季長ら肥後の御家人勢がどのように動いたかは史料上不明であり、通説では、彼ら肥後勢は合戦に向かう余裕無く、泰盛派の小式景資を助けることもできずに後悔を感じたのではないかと推測する（川添昭二氏・石井進氏）。これに対して、服部英雄氏は、季長が当時すでに反泰盛派に転じていたので合戦に赴かなかつたのだと判断したわけである。

だが、実際のところ、いずれの意見も、明確な実証的根拠があるわけではない。

2. 「蒙古襲来絵詞」奥書 A・B の分析

（1）奥書 A と詞七・詞二・絵二と 大矢野家の由緒論

そこで、本報告では、江戸時代の文政末期頃まで、原本の詞二と絵二とが大矢野家に秘匿されていて、まったく知られていなかったという事実（堀本一繁説）に注目してみたい。

まず、詞二には、「日の大将 [その日の指揮官]」たる小式景資が登場する。景資の面顔を、絵詞の主人公たる竹崎季長が進み、先懸けを遂げたら鎌倉将軍に報告してくれるよう、景資に依頼する（景資はこれに応諾）。これに対応する図様が、下に掲げる絵二である。図版右側でどっかり座っているのが小式景資であり、詞二と対照すれば分かる通り、今は失われている本図の前半部分に、おそらく竹崎季長が描かれていたのであろう（いずれの模本にも存在せず）。



(「蒙古襲来絵詞」前巻・絵二 / 太田彩『蒙古襲来絵詞』より転載)

問題は、いまや確認しえない、その季長の姿である。詞二によれば、先懸けを急ぐ餘り、下馬の礼すら取らずに景資の面前を過ぎたことが記されている。おそらく、図二の欠失部分(上掲図版の右方向)には、馬上の季長の姿が描かれていたことであろう。

上掲図版を見れば容易に判断できる通り、そうした季長の非礼ぶりを意図的に隠匿するために、図二の前半部分が切り落とされたと見るのが自然である。そうでなければ、竹崎季長の非礼な態度を説明する詞二が秘匿されたことの理由も見つからない。武家の秩序や礼制の厳しい江戸時代にあっては、そうした非礼な場面を持つ絵巻を後生大事にしていること自体、責めを受けるべき事柄だったのではないか。

*とくに、下馬の礼を取らなかったことについては、武家の礼法に著しく抵触した可能性、あるいは悪しき先例とされていた可能性がある。たとえば、江戸時代の武家の教養書でもあった、鎌倉幕府の正史、『吾妻鏡』あづまがみ 治承5年(1181)6月19日条には、頼朝配下のかずさのすけひろつね上総介広常が頼朝に対して下馬の礼をとらなかったことが問題となっている。「主君」頼朝への広常の反抗的な姿勢は『吾妻鏡』の随処にあらわれ、おそらく広常を反逆者と見なすための「伏線」が敷かれていたのだろう。この後、広常はいわゆる「東国独立論者」として頼朝により肅正されるこうちしょうすけ(河内祥輔説)。なお、下馬の礼に関する日中間の律令継受の問題については、おおすみきはる大隅清陽氏の研究に詳しい。

このように考えるのは、詞二の内容と、詞七・詞九のそれとがほぼ被っている——僅か5騎しか連れない竹崎季長が「日の大将」小式景資に対して自分の先懸けの意気込みをアピールする——にも拘わらず、後者の詞七・詞九には、季長が下馬しなかったことへの言及が一切見られないからである。

この点を推理するためにも、詞書きの字配りに注意してみよう。すると、詞二は前欠ではなく、博多において、竹崎季長が「日の大将」小式景資に先懸けの企図を伝えることから始まっている。つまり、戦争の現場・当時の発言の記録である。

これに対して、詞七・詞九では、1275年(建治元)けんじに季長が鎌倉についてから何とかしてようやく恩賞奉行安達泰盛の面前で庭中(訴訟)したときの台詞として書き起こされている。過去の出来事を振り返り主張する際に、くだんの「日の大将」云々のくだりが忠実に再現されたわけである。しかしながら、この訴えの文言のなかで、季長が小式景資に下馬の礼を採らなかったことへの言及はまったくない。いくらか先懸けのためとはいえ、上述の通り、本来なら武家として許されない行為だったからではないか。

*詞九(奥書Aと同筆)の料紙第43紙の右端には、松の枝がほのみ灰見えるので明らかに前欠ではなく、また料紙を跨いで絵が描かれていたことがはっきりと分かる(大倉隆二氏・佐藤鉄太郎氏)。ただし、残念ながら詞九は後欠であり、その全文が分からない。ただともかくも、この奥書Aと詞九との存在により、少なくとも二本の「蒙古

襲来絵詞」の存在したことが確実に言ったと言えよう。

繰り返しになるが、詞二およびこれに対応する絵二が大矢家にて秘匿されたことも、やはり無理からぬことと言ふべきだろう。「先懸け」という行軍秩序を乱す「勇敢な季長」ではあったが——竹崎季長は小武景資から博多息浜にて「一同に〔同時に・一斉に〕合戦すべし」と一度釘を刺されたにも拘わらず、手勢の少なさから「先懸け」で軍功を上げたいと申し出て許された経緯がある（詞二・詞七・詞九）——、上司たる「日の大将」景資に非礼な態度をとるほどの無礼者ではなかった、と筋書きを変えねばならなかった。そのために、上記の如き秘匿・^{せんじよ}削除が行なわれたのではないか。

*詞九（奥書 A と同筆）の料紙第 43 紙の右端には、松の枝が仄見えるので明らかに前欠ではなく、また料紙を跨いで絵が描かれていたことが明瞭に窺える（大倉隆二氏・佐藤鉄太郎氏）。ただし、残念ながら詞九は後欠であり、全文が分からない。ただともかくも、この奥書 A と詞九との存在により、少なくとも二本の「蒙古襲来絵詞」の存在したことが確実に言ったと言えよう（奥書 A と詞九とを含むものが確実な「別本のひとつ」である）。

そして、くだんの奥書 A——安達泰盛への謝意表明——の問題に戻ると、この詞九——小武景資に下馬の礼を採らなかったことを隠蔽——と同筆ということが決定的である。つまり、大矢野家は、竹崎季長を、一貫して安達泰盛—小武景資ラインに位置づけようとしていたと思われる。というのも、それが自家の由緒作成に有利に働いたからである。

第一に、大矢野家は自家の由緒を大宰大監〔じょう〕に求めており、これは大宰小武〔すけ〕、つまり武藤家の次位・部下に当たる。要するに、近世の大矢野家は、自家と小武氏（武藤家）との関係性の強さを強調（脚色・捏造）する必要があった。そのために、小武景資に恩義を感じず竹崎季長を、いわば媒介項として発見し、利用したのではないか。

また第二に、大矢野種保ら兄弟 3 人が 1281 年第二次戦争（弘安の役）の海戦で竹崎季長と行動をともにしていたかのように現状の絵巻では表現されていること（後巻・絵十六——「大矢野兄弟三人／種保」の語が明らかに後筆で書き込まれている）は、竹崎季長と大矢野家祖先とが戦場で生死を共にしたことを強調するためだろう。その季長は、弘安の役を扱う後巻では、安達宗盛（泰盛次男、肥後守護代）軍との密な関係を描かれていることも付け加えておきたい。

*ただし、なぜ家督を相続し、岩門合戦で勝利した小武経資の側に、大矢野家は肩入れしようとしなかったのか、考える餘地はあるだろう。それはおそらく、これまでの研究史が明らかにしてきたように、岩門合戦後に筑後・^{ちくご}豊前・^{ぶぜん}肥前・^{ひぜん}肥後の守護が北条得宗家一門に奪われてみすみす漁夫の利を取られてしまった経資の失態ぶり、加えて、のちの平禅門の乱（1293（正応 6＝永仁元））を経た翌年には旧泰盛派の復権が叶ったという事実が大きいだろう。また、源平交替史観の強い江戸時代からすれば、平氏＝北条家の支配にあらがった菊池氏・大友氏・小武氏は英雄的存在であり、そこに自家が密接につながるという「歴史」こそが重要である。大矢野家にとって、小武氏や菊池氏との密な関係が描かれた「竹崎季長絵巻」が有用視されたのも当然、と言えよう。

これまた繰り返しとなってしまいが、最終的に細川藩（肥後・熊本）の藩士となった大矢野家にとって、肥後の御家人であった竹崎季長と生死をともにしたこと——もちろん上記の通り実話とは考えがたい——は、肥後に生きる際の正統性を担保しえたと思われる。さすれば、大矢野家より先に本絵巻を有していたという名和顕興が甲佐社の神庫から本絵巻を横領した——あるいは大矢野家の人間が押領した可能性も否定できまい——という説（^{きくらいきよか}桜井清香氏）も、まったくの空論として捨て去ることはできないだろう。

（2）奥書 B と竹崎季長置文 鎌倉後期九州の徳政状況

それでは、奥書 A や詞九は、江戸時代の偽作および別本からの混入であって、その張本人は大矢野家、ということになるのであろうか。その可能性は高いと思うが、いま一つ、奥書 B にも若干不自然な点があるので、それを確認しておこう。

竹崎季長自身が残した関係文書が、塔福寺文書等に残っている。なかでも著名なのが、彼が知行地として安達泰盛・宗盛に認められた海東郷の所職（権益）の一部が、氏寺の塔福寺や海頭郷神社（海東社）などに寄進されたことを示す「竹崎季長置文」（遺言書兼寄進状）である（1293 年（正応 6）原作〔第 1 版〕、1314 年（正和 3）自筆改稿版〔第 2 版〕；『中世政治社会思想』（上巻）にも掲出）。ところが、寄進された先の地名・社名の表記方法を見ると、違和感を覚えざるを得ない。というのも、塔福寺文書等を見ると、すべて海頭郷神社と記され、絵巻の奥書 B に見えた海東郷という表記がまったく見られないのである。本人の名前の表記がともすれば変化するという中世において、これは些細な違いと思われるかもしれないが、もし夢想の神託により関東（鎌倉幕府・恩賞方）へ行き、海東郷地頭職を給わったことを記念して本絵巻を作成した（奥書 B）、というのであれば、季長自身は海東の表記に終生こだわったはずではないか。要するに、「海頭」（塔福寺文書）を「海東」（「絵巻」奥書 B）と表記してしまうこと自体、後者（奥書 B）が季長の意志と懸け離れている可能性を示唆する。

*奥書 B の最後には、「甲佐大明神の神徳を明らかにするため、これ〔蒙古襲来絵詞のこと——石井進説〕を記した」とある。ただし、現存する絵巻の詞書きや画面等では、甲佐大明神への竹崎季長の報謝の念を感じさせる場面がないことにも、石井進氏は注意を促す（しかしさほど配慮している形跡もないのだが）。なお、海東郷は甲佐社（肥後二の宮）の神領であり、ここで季長が所領を寄進した海東社（現・海東阿蘇神社）とは、海東郷におそらくは甲佐社（阿蘇末社）を介して勧請された阿蘇末社の一つであろう（いつ勧請されたかは分からないが、もし、季長が甲佐社の神徳に感じて勧請したのなら、季長が海東郷に入部した 1276 年（建治 2）正月 6 日以後のことと思われる）。また塔福寺はこの海東神社の近くにあり、新しく建立した神宮寺（1293 年（正応 6=永仁元）ころ建立カ）に塔福寺僧を入れるなど、竹崎家の海東社・海東郷支配を強化する手段であったと見られる。

そして、奥書 A・B ともに「永仁元年二月九日」と記した 1293 年は、上述の通り、8 月まで「正応 6 年」であった。ところが、上記「竹崎季長置文」（塔福寺文書〔第 2 版〕・秋岡家文書〔第 1 版〕）の日付は「正応六年正月廿三日」の如く、正確な元号で表記されている。これがもっとも不審な点である。つまり、「置文」が同時代史料であるのに対して、奥書 A・B は、ともに後世の作だとしか考えられない。

総合的に見ると、先述の奥書 A——近世初頭に大矢野家が書き添えたか——ほどではないにせよ、この奥書 B も、やはり不自然さが拭い切れない。とはいえ、同時代の政治・経済・宗教情勢に鑑みると、江戸時代の作とまで見なす必然性は乏しいように思う。すなわち、竹崎家による海東郷の政治的・宗教的支配を強化する動きが 1276 年（季長の海東郷入部）から 1293 年（海東社に神宮寺を建立、また自身の所領を寄進）までの間に徐々に展開された。そして、その支配を実質的に保全するものにするために、海東阿蘇社・新設神宮寺への寄進が取り決められたという見方である。

というのも、1293 年（正応 6・永仁元）4 月、平禅門の乱が起こって旧安達泰盛派が復権した。安達泰盛はいわゆる「弘安徳政」（1284 年（弘安 7）6 月）を主導し、別相伝所領（公家や武家の所有に帰した元の神領）を否定して本来の神領に戻す（神領興行）という、急進的な施策を採っていた（井上聡氏）。実際には、別相伝を否定する徳政政策はその後現われなかったのであるが、その後の 1297 年（永仁 5）「永仁徳政令」や 1312 年（正和元）「正和の徳政令」を見ても、神用を弁じない地頭御家人や下司名主の排除は共通しており、御家人竹崎氏としてもこうした政策を軽視するわけにはいかなかったはずであ

る。しかも、旧泰盛派の復権や北条貞時の専制方針——1293年（永仁元）、裁判の最終的判断が得宗北条貞時に集中する「執奏」制度を設け、翌年（1294）には貞時の裁定を覆そうとする越訴（再請要請）は一切受け付けなくした——や伏見天皇の親政志向——記録所庭中を整備し、雑訴（土地・所領関係の裁判）を月6度も開催する決まりを作った——が徐々に明らかになるにつれ、竹崎氏としても何らかの対応を余儀なくされたことだろう。最悪の場合、ほんらい甲佐社（肥後二の宮、阿蘇末社）の神領であった海東郷を否定され、所領・地頭職を甲佐社に回収されてしまう虞すらあっただろう。

そこで竹崎季長の採った策が、所領の一部を膝下の海東社（阿蘇末社）に寄進したり、神宮寺を設けたり、仏物・神物を堅持する「置文」を作る、という方策だったのではなかろうか。また、本主の甲佐社に対しては、こうした施策を正当化するべく、自家（竹崎家）と甲佐社との強い由緒を語る必要もあっただろう。そうした「深い因縁」を語るために奥書Bが作成された——、という可能性はないだろうか。

*こうした内政的動向と密接に絡み合った、対外的脅威の強まりがこの時期に存在したことにも注意が必要である（川添昭二氏）。1292年（正応5・至元29）7月には元の燕文楠の書が鎌倉に到達し（『鎌倉年代記』）、同年には都合3度目の高麗国書——元朝文書を仲介——が金有聲らによって、10月、大宰府にもたらされている（『金沢文庫古文書』・『高麗史』等）。耽羅（済州島）に漂着した日本人商人を送還すると同時に、中間に立った高麗の金有聲によって国書の表現は柔和に改められたが、みたび、日本の元朝への帰順を促す内容であった（植松正氏）。こうした元—高麗側の動きを受け、日本側は対外的緊張を強いられ、同月には諸国分寺・一宮等に異国降伏を祈らせている（『東寺百合文書』）。11月にはのちの鎮西探題となる、国防指揮官（大将）の選定にも取りかかっている（『親玄僧正日記』）。鎮西探題は、翌年3月に北条兼時・時家を任命して発足するほか（村井章介説）、4月には前述の通り平禅門の乱が起こって旧泰盛派が復権、6月には伏見天皇が親政を開始した。

すると、たとえ奥書Bに不自然な表記が窺えるにせよ、1293年（正応6）〔第1版〕～1314年（正和3）〔第2版〕の竹崎季長置文（塔福寺文書等）と、この奥書Bとがまったく無関係なものとするのは難しいと考える。むしろ、鎮西（九州）を代表する宇佐神宮（八幡宮）の式年遷宮（1289年（正応2））が遅れ、完了するも僅か2年で弥勒寺とともに焼亡した事件（1309年（延慶2））や、これと前後する九州の菅崎宮・香椎宮の焼亡、後深草上皇・龜山上皇・後二条天皇の死歿、鎌倉大地震、疫病の流行、慶元での日本商人騒擾事件（榎本渉氏）、得宗貞時の死去など、社会不安が相次ぎ、徳政の機運が高まっていたことに留意したい。実際、それゆえに1312年、「正和の徳政令」が発せられたのである。繰り返しになるが、そうした情勢のなかで竹崎季長が自領保全を図る手段の一つが、自身と甲佐社・海東郷とのつながりをアピールする、奥書Bの作文だったのではないか。そしてこうした内容の文面の奥書Bを付した以上、「蒙古襲来絵詞」の一本（原本？）は、やはり甲佐社に寄進されたとみるのが自然であろう。

もし、以上の如き推論が多少ともの射ているとすれば、奥書Bは、正和年間に記された蓋然性が高いと考える。海頭社（塔福寺文書）と海東郷（「絵巻」奥書B）という漢字表記の違いは、時期による違いというより、アピールする対象（宛先・読者）の違い、竹崎季長の政治姿勢の表れ方の違い、と見て取るべきかもしれない。

おわりに

羊頭狗肉の感は免れないが、以上の議論を、補足も含めてまとめておく。

まず「絵巻」奥書Aについて。——おそらく、大矢野家にとって都合の良い奥書Aは、近世になって、肥後・熊本藩士として生きることになった大矢野家が作成（捏造）したものではなかろうか。肥後菊池氏

の存在が絵巻のなかで強調されていたことは元々のものと見受けられるが、本絵巻冒頭に記された「豊後国守護大友／兵庫守頼泰之手／軍兵」の画中註は、詞書きにも対応するものがなく、不審である。小式・菊池・大友の鎮西三大勢力との関係、とくに菊池・大友は阿蘇との関係(?)をアピールするための加筆なのではなかろうか。大友氏が阿蘇社内部に明瞭に関わるようになるのは16世紀・戦国期のことであり、これも画中註記が鎌倉・南北朝期よりも大幅に遅れる可能性を示唆しよう。

次に奥書Bについて。——竹崎季長の海東郷支配と直接・間接に関係する奥書Bは、弘安・永仁・正和の徳政状況のなかで、季長が自領の保全のため——つまり別相伝否定や地頭御家人排除を趣旨とする徳政令が出た場合、それに対抗するため——、甲佐社との縁の深さを強調するべく起草したものであったと推察される。

なお、宮次男氏や服部英雄氏が結論するように、本来、奥書A・Bと絵巻本体とは別物であったと見ることは、ある程度正しいだろう。しかし、石井進氏の論の如く、まったく絵詞と無関係であったと断ずるのも難しい。別言すれば、絵巻の現状を理解するためには、奥書A・Bの趣意をこそまず追究すべきなのであって、基本的には、奥書A・Bそれぞれに整合するように絵巻は改編されてきたと見るべきと思う。だから、絵巻と奥書とは、決して「無関係」の一言で片付けるべきではない。一気に「蒙古襲来絵詞」原態に辿り着くことが極めて困難である以上は、こうした段取りを踏んで考察を進めていくほかないと思うのだが、如何であろうか。

また、石井説の如く、竹崎季長が安達泰盛・小式景資らを追慕するために「蒙古襲来絵詞」を制作したという可能性は、まだ払拭され切ったわけではない。本報告が論じたのは、後筆と見られる奥書A・Bの歴史的な性格に過ぎないのであって、いまは分からない「蒙古襲来絵詞」原態・原本制作時の竹崎季長の思惑は、依然としてヴェイルの彼方にあるからである。

今後、この「蒙古襲来絵詞」をさらに踏み込んで分析するためには、上記の如き奥書A(近世初頭?)や奥書B(正和年間?)の歴史的特徴を踏まえつつ、その都度行なわれたであろう改作・加筆等を析出していくことが求められよう。もちろん、奥書A・Bそれぞれのシェーマにそぐわない加筆や改竄、削除等が存在する可能性も当然あるだろう。また逆に、「絵巻」現状そのものの分析から、奥書AやBの評価を改めていかねばならぬ場合も生ずるだろう。今後、報告者も微力を尽くし、引き続き、本「絵巻」の謎解き・絵解きに挑戦していくことを誓いたい。

【主な引用・参考文献】

- 石井 進 1972 「竹崎季長絵詞」(詞書き翻刻・解説)『中世政治社会思想』(上) 岩波書店 ※新装版 1994
——— 1991 『中世史を考える——社会論・史料論・都市論』 校倉書房
——— 2000 『鎌倉びとの声を聞く』 NHK 出版 (日本放送出版協会)
井上 聡 2013 「神領興行法再考」『東京大学日本史学研究室紀要別冊 中世政治社会論叢』 同研究室
植松 正 2015 「第二次日本遠征後の元・麗・日関係外交文書について」『東方学報』
榎本 渉 2007 『東アジア海域と日中交流：九～一四世紀』 吉川弘文館
大倉隆二 2007 『「蒙古襲来絵詞」を読む』 海鳥社
大隅清陽 2011 『律令官制と礼秩序の研究』 吉川弘文館
太田 彩 2000 『絵巻＝蒙古襲来絵詞』(日本の美術 414) 至文堂
荻野三七彦 1932 「蒙古襲来に就ての疑と其解釈」『歴史地理』 59 巻 2 号
川添昭二 1977 『蒙古襲来研究史論』 雄山閣出版

- 工藤敬一 1974 「竹崎季長おぼえがき」『日本歴史』317号
- 河内祥輔 2013 『頼朝がひらいた中世——鎌倉幕府はこうして誕生した』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房
- 小松茂美 1988 『蒙古襲来絵詞』(日本の絵巻 13) 中央公論社 ※再版 1990
- 佐伯弘次 2016 「蒙古襲来以後の日本の対高麗関係」『史淵』153 輯
- 桜井清香 1967 『元寇と季長絵詞』徳川美術館
- 佐藤鉄太郎 2005 『蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究』錦正社
- 2016 「元寇の実相：服部英雄著『蒙古襲来』の実証的批判」『軍事史学』52 卷 2 号
- 中村一紀 1975 「蒙古襲来絵詞について」『熊本県文化財調査報告書(17)竹崎城』熊本県教育委員会
- 服部英雄 2014 『蒙古襲来』山川出版社
- 宮 次男 1964 「蒙古襲来絵詞について」『日本絵巻物全集 (9) 平治物語絵巻・蒙古襲来絵詞』角川書店
- 村井章介 1988 『アジアのなかの中世日本』校倉書房
- 2001 『北条時宗と蒙古襲来：時代・世界・個人を読む』(NHKブックス) 日本放送出版協会
- 2006 『中世の国家と在地社会』校倉書房
- 堀本一繁 1998 「「蒙古襲来絵詞」の現状成立過程について」『福岡市博物館研究紀要』8 号
- 2012 「『蒙古襲来絵詞』の復原にみる竹崎季長の移動経路」『交通史研究』78 号